第６回 11/1　「フォークの名曲『神田川』から４０年、歌謡曲は今…」

喜多條 忠（きたじょう・まこと）先生　　作詞家・一般社団法人日本音楽著作権協会 理事

昭和 22 年 10 月 24 日　大阪生まれ
早稲田大学中退後、放送作家を経て作詞家へ
【主な作品】＊「神田川」「赤ちょうちん」「妹」（南こうせつとかぐや姫）
＊「メランコリー」（梓みちよ）＊「やさしい悪魔」「暑中見舞い申し上げます」
「アン・ドウ・トロワ」（キャンディーズ）
＊「いつか街で会ったなら」（中村雅俊）＊「ハロー・グッバイ」（柏原よしえ）
＊「ロンリー・ウルフ」（沢田研二）＊「男達のメロディ」（SHOGUN）
＊「橋場の渡し」「凍て鶴」（五木ひろし）＊「海峡の宿」「霧笛橋」（伍代夏子）
＊「男酔い」「その昔」（吉幾三）＊「阿修羅海峡」（松原のぶえ）
＊「鳴き砂　海風」「西馬音内　盆歌」「松山しぐれ」（城之内早苗）
＊「大阪ふたり雨」「エリカの花の咲く頃」（都はるみ）
＊「紫欄の花」（石川さゆり）＊「流氷波止場」（市川由紀乃）
【著書】エッセイ集「この街で君と出会い・・・」「ホウキを忘れた魔女たち」（立風書房）
詩集「最終列車も見送って」「神田川」（新書館）
小説「女房逃ゲレバ猫マデモ」（幻戯書房）2008 年刊
現在　日本作詩家協会　副会長、JASRAC　理事

《講義概要》

作詞家として数々の名曲を生み出し、コラム・小説などの執筆活動にも従事し活躍している喜多條忠氏が、作詞家の仕事やヒット曲の裏側について講義を行った。

講義ではまず、作詞家になったきっかけや仕事内容、作詞の方法等について、貴重な経験談を織り交ぜながら説明するとともに、「コンプレックスが人を育てていく」「作詞家や作曲家は格好付けずにどれだけ裸になれるかが勝負」「体験以上の武器はない」「苦しかったことや悩んだこと全てが栄養になる」等の数々のメッセージを伝えた。

続いて、ヒット曲を生み出す条件について解説し、これまでの流れを断ち切る新しい歌を提供して歌手のスケールの幅を拡げることが理想であり、そこに今まで誰も書けなかった言葉とメロディーが重なることでヒットが生まれることを示した。さらに、プロとアマチュアの違いについて、自身の作詞作業を例に、「自分の作品を客観的に見られる人がプロ」「隠された努力に耐える決意のある人がプロ」であると言及。「自分に厳しく、そして一日一日を純粋に感動する心を持つ」ことが大切であり、様々な経験を受け止めて生きて欲しいと伝えた。

最後には、ヒットの秘密と隠された条件について名曲５作品を例に、歌詞に込められた思いや曲に大きなインパクトを与えている言葉・フレーズを解説し、作詞の奥の深さと魅力を伝えた。学生は数々の言葉に感銘を受けるとともに、人生において大切な考え方を学んだ。

《受講生の感想》

●作詞家の方がどのような志を持って作品を送り出しているか知ることができた。いくつもの見直しと作詞家自身の体験によって紡がれている。それを頭に入れて作品を鑑賞していきたい。プロとして作り上げている人たちの表現がもっと大切にされる世の中になって欲しいと思った。また、名曲の歌詞を解説していただいたことで、表現技法の発見や情景の描き方を改めて認識することができた。歌詞を理解するのは他の作品も知っておく必要がある。もっとたくさんの作品や体験をしていきたいと思う。

立命館大学・法学部・3回生

●ヒット曲の裏側には今まで誰も書けなかった曲と詞と、アーティストが歌ったことがないスタイルのものが条件の一つだと知りました。誰も書けないことを書くには、人が体験した事がないことを体験することが武器だという言葉が印象的でした。今日の講座の中で紹介されていた数曲の歌詞を見て情景が感じられたり意味が深かったり、言葉の持つ力に感動しました。「考えられた曲を考えながら聴く」という事が基本だけど改めて一番大切な事ではないかと考えました。

立命館大学・産業社会学部・2回生

●自らの作詞に対する思いや経験を語ってくださり、本当に貴重な時間でした。「自分の詞、作品を客観的に判断できるのがプロで、書いたという行為だけで満足しているのがアマチュア。プロとアマチュアの差は隠された努力にどれだけ耐えられるかということ」というお言葉がすごく印象的で心に響き納得しました。

立命館大学・産業社会学部・2回生

●自分の作品を客観的に見ることができる者がプロであり、それができない者がアマチュアだという言葉がとても心に残りました。これはこの仕事にだけ言えるのではなく、人生においても言えると思いました。人があまりできないような体験はたとえそれが苦しくても、大変でもこの世界では大きな栄養になることが分かりました。それと同時にどんな体験も無駄にならないだけでなく形を変えて人を助けたり支えたりする力にもなるのだと思いました。そして物事を純粋に感じられる、感動できる心を失いたくないと思います。

立命館大学・法学部・3回生

●歌に対する先生の素直な考えと想いを聞いてとても感動しました。プロとアマの違いのお話はとても勉強になりました。自分をいかに見つめ直すことができるか、自分と向き合うことができるか、自分を厳しくしていくことでよいものが作れるのだなと思いました。一日一日を純粋に楽しんで自分の人生を見つけていこうという言葉にとても感動しました。先生の話を自分の今後の生活に活かしていきたいです。

立命館大学・産業社会学部・2回生

●「コンプレックスが人を育てる」という見方は私にはなかなかできないです。先生の言葉を受け、私も自分の弱点や悪い所と向き合ってみようと思いました。また、自分の作品を自分で客観的にみて、何度も修正するというプロとしての姿勢は、とても素晴らしいと思いました。作曲だけではなく全ての作り出したものへの姿勢にも当てはめられるものだと思います。

立命館大学・産業社会学部・2回生